

HIMALAYA

ヒマラヤ
No. 123



1982 FEB.

日本ヒマラヤ協会



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

1983年ヒマラヤ登山学校隊員募集

ヌン (7,135m)

1983年度ヒマラヤ登山学校は、カシミールの盟主ヌン峰で実施することに決定しました。これは単なるバック登山とはまったく異なり、自ら遠征を行なえる人材を育成することを主眼としており、経験豊富なインストラクターのもとに、正しいセオリーにのっとった確実な登山を指導しています。隊員はすべて、装備・食糧・輸送・梱包・渉外等の具体的実務に参画していただき、また国内山岳での強化合宿も行なうなど、ヒマラヤ遠征全般を体得できるように組まれております。

過去の卒業生は、現在ヒマラヤで幅広い活動を行っており、登山学校の経験を基にしてさらに遠征を実践している人は9名に達し、その中には8,000m峰登頂者4名も含まれています。

登山学校隊の実績は下記のとおりです。

- 1977年 タルコット (6,099 m)
(JACに協賛して行なった)
- 1978年 ヌン (7,135 m) 4名登頂
トリスルI峰 (7,120 m) 6名登頂
II峰 (6,690 m) 7名登頂
- 1979年 キャシードラル (6,400 m) 6,000 mまで

- 1980年 ケダルナート・ドーム (6,831 m)
19名登頂
- 1981年 ナンダ・カート (6,611 m) 事故のため断念
- 1982年 クン (7,077 m) 現在準備活動中

実施要項

- 目的 ①ヌン (7,135 m) 登頂
②高所登山の基礎修得
- 時期 1983年7月末～8月末 (35日間)
- 負担金 70万円 (航空運賃の変動等により変わることもあります)
- 定員 20名 (申込順)
インストラクター4名 (医師含む)
- 申込み 1983年6月末までに下記宛に申込みのこと (資料を送ります)
- 〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号日本ヒマラヤ協会
- ★今年度より準備活動、強化合宿等をより万全に行なうため、締切りを早くします。希望者は早急にお申し込み下さい。

この登山隊の旅行手続は、(株)西遊旅行が担当します。旅行業代理店業1976号

表紙写真

アンナプルナ内院南氷河よりマチャプチャリ (6997m) を望む。

(古越文隆)

ヒマラヤ No.123

1. ナンダ・カート検索報告

4. ヒマラヤニュース〈地域ニュース・インフォメーション・トピックス・新刊案内〉

8. カン・グルー登頂 ————— 岳友会ライフ&マウント

13. ケダルナートの南面 ————— 東京アルコウ会

16. **連載** 未踏への誘い (2) ————— 稲田定重
VISIT TO HIMALAYAN CLIMBING TEAM (2) ————— 都庁山岳部
ヒマラヤ閑話 ④⑧ ————— 水野勉

24. 事務局日誌・寸感

インド・ヒマラヤ

ナンダ・カート 搜索報告

日本ヒマラヤ協会ナンダ・カート 搜索隊

インド・ヒマラヤ、ナンダ・カート峰の登山学校隊は、9月27日夜から28日朝にかけて、C3に入っていた藤倉副隊長以下7名が行方不明になるというアクシデントに見舞われました。(本誌No.121参照)

協会ではこの事故の解明のため、10月21日～12月6日にかけて、搜索隊(菊地隊長以下11名)を派遣し、搜索活動を行いました。懸命な搜索活動にもかかわらず、遺体及び遺品の発見はできませんでしたが、以下にその活動の概要を報告致します。

搜索隊第一陣は、10月21日に菊地、鈴木 の2名が、カトマンズにあるH A Jの装備をデリーに輸送する任務を帯びて出発した。つづいて10月25日に、尾形以下の本隊が直接デリーへ飛んだ。26日に全員がデリーに集結し、2日間であわただしく出発準備を済ませ、10月28日午後2時半、デリーを後にした。ビンダリ氷河右岸河岸段丘上のカルカ(3700m)にBCを建設したのは11月2日である。

隊の構成は下記の通り。

〈隊長〉菊地薫、〈隊員〉尾形好雄、新郷信廣、山田昇、佐久間隆、館野秀夫、宮崎久夫、佐藤誠、鈴木茂、若尾巻広、片岡邦夫、〈現地サポート要員〉村上豊子、物井洋子、絹川忠直、〈リエゾンオフィサー〉マンガル・ピサ

● 事故現場への登攀

11月3日 停滞。前日の正午ごろより降り初めた激しい降雪が一日中つづき、テント一張が押しつぶされる。これは、かなり大型のサイクロンが上陸した影響によるもので、下界の平野部では大雨に見舞われ、大きな被害が出ている。

11月4日 2日間の荒天が過ぎ去り天候が回復したこの日、ベース・キャンプで「ハタケ」の儀式(安全登山を祈願する儀式)を行ない、尾形隊(尾形、宮崎、佐藤)はC・1へのルート偵察に出かける。入りくんだ複雑な地形と前日までの積

雪によりさっぱり距離をかせげないまま、4,080mを最高到達点としてBCに戻る。

11月5日 C・1へのルート偵察。尾形、宮崎 H・P(高所ポーター)1名は前日に引き続いて藤倉ルートをトレースしてC・1へのルート偵察を行なうも不安定な積雪層に難渋して4,320mの上部函養台地の稜までしか到達できずB・Cへ戻る。一方、別ルート偵察として山田、鈴木はビンダリ河からビンダリ氷河へ向ったがアイス・フォール(氷の滝)の状態が悪く下部からのルートは不可能との判断を下し引き返す。

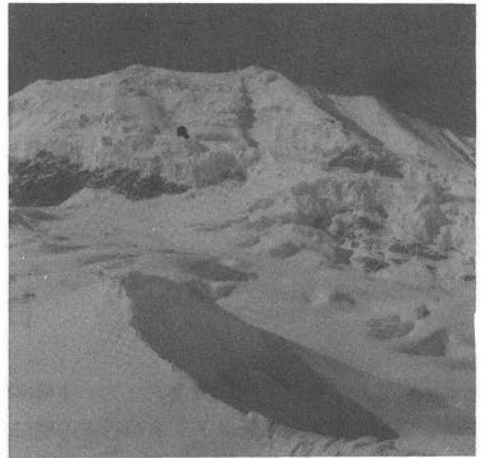
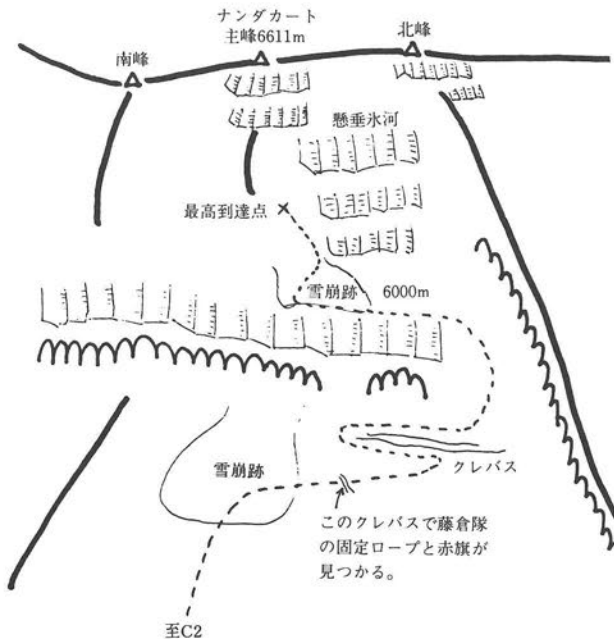
11月6日 前日のルート偵察の結果から藤倉ルートとは別に上部函養台地の稜に出るルートを工作することにする。これは、9月の段階では運動グツで登れた草付の斜面が一面雪でおおわれてしまい雪崩の危険が危惧されたためである。

*
Bルンゼ(岩の溝)とCルンゼの間の尾根にルートを取り、固定ロープを9本張って上部函養台地の稜に出る。この日はさらにこの稜の裏側に入る沢へと下り沢を渡って対岸を横切ってC・1予定地が間近かにながめられる所まで足を進める。

また、この日は片岡、若尾の2名がB・Cに到着する。

*～上部函養台地の稜にくいこむルンゼ(岩の溝)を便宜上B・Cよりから各々A, B, C, D, ルンゼと命名した。

11月7日 この日、漸く待望のC・1予定地に



▲C2下部より望むナンダ・カート(6611m) 黒点部分が、事故に遭ったと予想されるC3地点。

◀ 捜索現場付近の概念図。

到達する。前日の最高到達点から「象の頭」と呼んだ稜線へ危険な雪のクローワールを登って到達し、この「象の頭」4,500mを捜索隊のC・1とする。

11月8日 菊地、若尾、H・Pの2名はC・1への荷上に向う。残りのメンバーは翌日からのC・1滞在に備えて休養。

11月9日 尾形隊(尾形、宮崎、佐藤)、山田隊(山田、片岡、鈴木)の6名C・1に上がり、この日からC・1滞在となる。

11月10日 C・2へのルート工作。上部で真一文字に連なる懸垂氷河に向ってC・1より真っ直ぐ登り弱点をぬってこの懸垂氷河を越え、その上のクレバス帯をトラバース(横切る)してスノー・ドームの下へ到達する。この日は途中、固定ロープを11本張って5,050mまで達する。

11月11日 C・2へのルート工作完了。前日の最高到達点から雪面を登ってスノー・ドームに出てクローワールの入口に向う。この入口の手前で2本の藤倉隊の赤旗が見つかったが後日の大雪で2本とも埋もれてしまった。

クローワール内には藤倉隊の固定ロープがぬけ

出る地点まで張られてあったが大半が雪に埋もれており掘り出すのに苦勞する。この日はクローワールをぬけ出した5,380mまで到達する。

11月12日 朝から激しく雪が降り続き全キャンプとも停滞となる。

11月13日 前日からの降雪が朝まで続き新雪雪崩の危険が危惧されたためC・1はこの日も停滞となる。

一方、菊地、若尾、H・P2名はC・1までのルート確保にB・Cから向かい途中までラッセルを行う。

11月14日 第二キャンプ建設。2日間の降雪ですっかりトレールはかき消されラッセルのアルバイトを強いられたが、この日5,400mの地点まで達して捜索隊C・2建設する。山田隊(山田、片岡、鈴木)はそのままC・2に滞在する。

物井、村上それに11月4日にメール・ランナーとして下った絹川の3名、BCに到着。

● 捜索活動

11月15日 C・2入りした山田隊3名は、藤倉の第3キャンプとおぼしき5,900m付近に達し

搜索するも、何も発見出来ず。C・3への途中のクレバスに張られた固定ロープを発見しただけに終る。

この日、C・2入りした尾形隊（尾形、新郷、宮崎）は、C・2付近で藤倉隊C・2の搜索を行なうも手がかりなし。

11月16日 C・2の尾形、山田の両隊は、事故現場と想定されるC・3地点の搜索に向う。

C・1からの佐久間、佐藤は、C・2付近の搜索を行なうも、共に何も見つからず。

館野、絹川の2名はB・Cより下山。

11月17日 C・2の尾形、山田の両隊は、引き続きC・3地点の搜索を行ない、C・1からの佐久間、佐藤はC・2付近の搜索を行なう。

11月18日 C・2、C・1とも休養停滞。

11月19日 この日からC・2の6名は、藤倉隊C・2の発見に全力を注ぐべくC・2付近の搜索を行なう。

これは、前日の打ち合わせで次の2点の反省が上げられ、

- 藤倉隊C・3とおぼしき場所が余りにも広大な雪原でポイントを絞りにくい。

- 9月27日ごろの旧雪層というのはどの辺に位置するのか、果してゾンデ棒（2.5m長さの鉄の棒）で到達しているのかという疑問。まず、C・3よりはポイントを絞り易いC・2を探し出し、その埋没状況を見てから改めてC・3を搜索しようという事になる。

佐久間、佐藤の2名C・2入り。

C・1より菊地、リエゾン・オフィサーも上がりC・2付近の搜索を行なう。

11月20日 藤倉隊C・2の搜索活動。

11月21日 藤倉隊C・2の搜索活動。館野、絹川、帰国。

11月22日 尾形隊（尾形、新郷、宮崎、佐藤）はインド・ナインタル隊のC・3付近の搜索を行なう。

山田隊（山田、佐久間、片岡、鈴木）は、11月15日に発見したクレバス内の固定ロープの回収を行なう。回収している時に雪面下15cm位の所で1本の赤旗が出てきた。

C・1からの菊地は藤倉隊C・1の搜索を行なう



くまなくゾンデーレンされた搜索現場。

も発見出来ず。

C・2の燃料（EPIガス）切れにより8名のC・2滞在は、この日までとし、翌日からは石油コンロを使用しながら4名の滞在者になる。

11月23日 C・2の尾形、山田、片岡、鈴木はC・2付近の搜索を行ない、午後は休養。

C・1から藤倉隊C・1に向かった菊地、リエゾン・オフィサー、H・P 2名は、2mもの雪の下からダンロップ・テントを発見する。

新郷、佐藤はB・Cへ下山。

宮崎、佐久間はC・1に下り、C・1滞在者は菊地、若尾を含めて4名となる。

11月24日 C・2滞在の4名は、藤倉C・2の搜索に全力を注ぐも何も見つからず。

11月25日 搜索活動最終日。

C・2滞在の4名は、再び事故現場と想定されるC・3付近に赴き最後の搜索活動を行なうも到頭何も見つけることが出来なかった。

ブリザード（吹雪）の吹き荒れる中、14時半に断腸の思いで搜索活動を断念する。

C・1からの4名もC・2付近の最後の搜索を行なうも最後まで何も見つからず無念に終る。

11月26日 C・2、C・1の高所キャンプを撤収して全員B・Cに集結する。

11月27日 隊荷整理とB・Cの撤収準備。

11月28日 B・C撤収。

B・C下のナンダ・カートが正面にながめられる大岩にレリーフを刻みこんで慰霊祭を行なう。その後B・Cを後にブルキアへと下る。

12月3日、デリーに到着。関係諸機関への報告、事後処理を済ませ、5日、帰国の途についた。

（文責 尾形）

地域ニュース

中印、20年ぶり国境交渉

中国とインドの雪解けを象徴する第1回国境交渉のため、ゴンサルベス外務次官を団長とするインド代表団が、7日、ニューデリーを出発、北京入りした。交渉は10日から14日まで北京で開催される。中印国境画定問題は、62年中印戦争以来、両国間の最大の懸案となっているが、さる6月の黄華・中国外相訪印の際、ガンジー・インド首相との間で20年ぶりに交渉を始める合意が成立した。この交渉では、交渉の大枠を固めるのと並行して、中国側に「どのくらい譲歩の余地があるか」を探るのが、インド側の狙いである。

(12月8日 朝日新聞)

インフォメーション

日本ヒマラヤ会議札幌会場

- 〈期日〉 2月21日(日) 10時 ~ 17時
- 〈場所〉 未定
- 〈会費〉 1500円
- 〈内容〉 カンチェンジュンガ1981報告、ヒマラヤ登山とトレーニング、日本隊の事故原因究明、ナンダカート登山と搜索報告、他。

海外登山技術研究会

(社)日本山岳協会の主催によるこの研究会は、今年で第20回めをむかえるが、下記のとおり開催される。

- 〈期日〉 1月30日(土) ~ 31日(日)
- 〈場所〉 東京・八王子大学セミナーハウス
- 〈費用〉 12,000円
- 〈内容〉 8,000m峰登山、最近の傾向、チョゴリ峰(K₂)をどう登るか。

〈募集人員〉 50名

〈問合せ・申込み〉 〒150 東京都渋谷区神南
1-1-1 岸記念体育会館 日本山岳協会

高所順応研究会

東京都山岳連盟では今年度のヒマラヤ登山隊に向けて下記のとおり高所順応研究会を開催する。同研究会は高所順応の方法論、肺水腫その他高所障害の対策に的を絞った研究会である。

- 日 時 2月28日 午前9時~午後4時
- 会 場 東京都勤労福祉会館(地下鉄日比谷線「八丁堀」下車徒歩1分 TEL 03-552-9131)
- 会 費 3,000円
- 問合せ 東京都山岳連盟事務局

上記にハガキで所属山岳会、登山隊名住所、電話番号、氏名を明記の上会費を振込んで下さい。

トピックス

ネパールの盲人に光を!!

~善意で今年も医師団~

百人に1人は失明者というネパール。貧しい無医村で「アイ・キャンプ」という野外開眼手術に参加した日本人チームの記録写真展「盲人に光を」が、来月1日から5日まで、東京で開かれる。大阪在住のカメラマン川上緑桜さん(51)が、昨年末、チームに同行して撮影した。「写真を通じて、ネパールの人たちの役に立ちたい」と、写真展を思いついた。東京に先だって大阪でまず開かれたが、百万円を越す浄財が集まった。東京の会場でも募金箱を置く予定だ。これらの寄金をもって、今年も年末、医師グループが現地派遣される。

展示会場は、中央区銀座1-7-7、銀座ラ・ポ
ーラ二階催し物サロン(TEL 563-5501)

機械の供与で、ブータンの第五次経済計画(1981
~1987年)の農業機械化計画に使用される。

(11月27日 読売新聞)

「さまよう湖」説は誤り?

シルクロードの天山南路にあるロブノール(中
国新疆ウイグル自治区)は「さまよえる湖」とし
て有名だが、中国の科学者たちはこのほど、ロブ
ノールが移動したように見えたのは湖内部で湖水
の位置が変化したため、湖自体がほかへ移動し
たことはないとして「さまよえる湖」を否定する
結論を出した。

上海紙「解放日報」27日付の報道によると、こ
の結論は中国科学院新疆分院ロブノール総合考察
隊が現地での測量や採取資料をもとに出した。

これまで国外の多くの地理学者は、ロブノール
が古い地図に示された位置にないことなどから、
湖は地下水流や大風の吹き上げる砂の影響で動き、
約150年を周期に時計の振り子のように南北へ移
ると考えていた。

同考察隊はこれに対し「ロブノールの湖水は気
候の変化や地殻変動で、拡大したり縮小したり、
また南に寄ったり北に寄ったりしたが、本来の湖
の範囲を越えて移動したことはなかった」と結論
している。(11月29日 朝日新聞)

ブータンへ3億円無償援助

日本がブータンに与える総額3億円の無償援助
に関する交換公文が27日、原駐インド大使、タシ
ドブゲル大使の間で調印された。日本がブータン
に無償資金援助を行うのはこれが初めてで、同援
助は今年度中に実施される。

同援助の内容は耕運機、トラクターなどの農業

新刊図書一覧

- アムネマチン 上越山岳協会 ベースボールマ
ガジン社 11月30日
- 歩くスキーコースガイド 水野湧司 岳書房
11月30日
- 遥かなりエヴェレスト 島田巽 大修館書店
12月1日
- シルクロード物語 松本和夫 論創社 12
月1日
- ネパール叢書「神話と伝説の旅」川喜田二郎、
加藤千代、他 古今書院 12月4日
- 野山の12カ月 宇都宮貞子 評論社 12月5日
- 山と書物 小林義正 築地書館 12月7日
- 続山と書物 小林義正 築地書館 12月7日
- 東京都松原村から 玉木英幸 三一書房 12月
11日
- K2「7人の闘い」 ラインホルト・メスナー
横川文雄訳 山と溪谷社 12月12日
- 中国登山ハンドブック 上越山岳協会 ベース
ボールマガジン社
- 雪崩の世界から 新田隆三 古今書院
- 動物と自然保護 藤原英司 朝日選書 12月
17日
- 雪国動物誌 高橋喜平 創樹社 12月19日
- カラコルムを越えて ヤングハズバンド 白水
社 12月21日
- 西域への砂漠の道 ラティモア 白水社 12
月21日
- 詩集「山」 串田孫一 文京書房 12月25日

原稿募集

ニュース ヒマラヤ(中央アジア含む)の各地域の社会情勢・現地事情(入山事情)の変化、日本を含
む各国登山隊の動勢、その他気のついた事をお知らせ下さい。ニュースソースも併記して下さい。
紀行 遠征、トレッキング、旅、etc.....ヒマラヤ及びシルクロードに関する地域なら何でも結構
です。

★投稿は会員、非常会員を問いません。採用分には全国共通図書券をさしあげます。

★送り先 〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1 淀橋食糧ビル 506

日本ヒマラヤ協会

日本ヒマラヤ会議報告（高知）

昨年に続いて高知では2回目のヒマラヤ会議が開催された。世話人の国沢鎮雄氏の水際立った手配により32名の参加者があり、盛況であった。

日時 56年12月5日（土）15時30分～6日（日）正午

場所 高知会館（高知市本町）

国沢世話人の司会により進め、主催者側として稲田専務理事が御礼の言葉と会議の趣旨を述べ、高知県岳連山崎会長のごあいさつがあって日程に入った。

登山報告「HAJカンチェンジュンガ1981」

15.45～17.00

稲田により計画成立にいたる経緯、準備段階での曲折、チームづくりの基本思想等の話のあと8ミリ映画により報告された。テープレコーダーと画面が仲々同調せず見苦しい点があったのは残念だったが、ひと味違ったビッグ・エクスペディションとしての認識がなされたようである。

講演「カンチェンジュンガからエベレストへ」

17.00～18.20

講師 川村晴一氏（山学同志会）

当初、小西政継氏が予定されていたがK2偵察後という事情もあって直前で来れなくなり川村氏が代理したわけである。1980年カンチェンジュンガ北壁からの無酸素登頂に成功した時の体験をベースに、8,500m以上の山の登り方の実際と氏の登山観が話された。淡々とした語り口ながら強烈な信念と経験に裏打ちされた氏の話は説得力

があった。8,000mの無酸素登山と8,500m峰の無酸素登山は同じ8,000mでもはっきり異なるようである。

19時から懇親会に入り21時まで自己紹介をまじえて楽しく過した。終了後は会場を市内の飲み屋街に移し、驚くなかれ第数次回に及んだものである。土佐の人々の豪快な飲みっぷりに啞然とするばかりだった。

12月6日

登山報告「クン西壁1981」9.00～10.30

名越 実氏

スライドによりアプローチと登攀のめまろが報告された。難度においてヨーロッパアルプスの第一級ルートを上回るという西壁での登攀は、変り行くヒマラヤ登山の実状を強烈に印象づけられた。

「最近の高所登山の傾向と戦術」10.30～

11.40 稲田定重

冬期、無酸素、アルパインスタイル等、斬新な試みが積極的になされつつある近年のヒマラヤ登山の動向、その背景、事例分析等の話を資料をもとに行なった。アルパインスタイルが高度順応の上に成功していること、流れがどうであれ自らの力を適正に評価した登り方こそベターであることなど、遭難多発の中でじっくり考えてみるべきことが話された。

この会議の開催にあたって、非常なお骨折りをいただいた国沢鎮雄氏、山崎会長に深甚の謝意を表したい。（稲田記）

広島集会報告

恒例の広島集会は、12月6日午後6時30分から広島駅前の甘党の店の2階（広島山岳会のルームになっている）で行なった。世話役は、名越実氏である。講師は稲田専務理事。

当日は日曜の夜とあって日が悪かったが12名の参加を見ることができた。

「最近の高所登山の傾向と戦術」については、会場費代りの“雑煮”を食べながら行なう。

「カンチェンジュンガ1981報告」は8ミリ映画（約1時間）を上映した。録音機のボリュームが低いので弁士付きで行なう。

協会において準備した資料の補足説明を行ない

9時30分閉会。

稲田と一緒に高知を出た名越氏はフェリーに乗り遅れて閉会直前に到着。空路大阪経由で来た稲田

は定刻通りに着いた。会終了後、市内の盛り場に繰り出して例により11時過ぎまで話はずんだ。

長崎集会報告

長崎地区の会員10名が参加して12月7日午後6時30分から長崎駅前の交通会館3階談話室で開催された。

長崎は初めてという稲田専務理事が講師となり映画・スライドを中心に行なったが、9時までという制限があり時間不足を感じた。

まず、「ヒマラヤ最新情報」ということで、最近の高所登山の傾向や登山界の話題を含めての話があった。時間がなく地域事情はごくおおまかな点にふれたのみ。

「ナンダ・カート事故報告」では、事故発生以

来今日までの経過と資金カンパへの感謝、今後の対策が報告された。

「カンチェンジュンガ1981」は、8ミリ映画でB.C以上の部分のみ上映した。

「ガンゴトリの山々」はスライドで紹介、併せて行う予定だったケダルナート・ドームの8ミリは時間切れで中止。

終ってから会場を付近の料理屋に移し、11時半頃まで話に花が咲いた。勝山良三さんが集会開催の労をとってくれた。記して感謝申しあげる。

都岳連海外登山研究会開催さる

恒例となった東京都山岳連盟海外登山研究会が、11月28日(土)午後5時より29日(日)午後3時まで代々木のオリンピック記念青少年センターにて開催された。

28日は登山隊報告が2隊行なわれ、最初に日本山岳協会が来年の本番に向けて送り出したチョゴリ(K2)偵察隊(小西政継隊長以下5名)の模様を佐藤英雄隊員がスライドを使って報告した。今までまったく未知だった中国領カラコルムの氷河や山の姿は、大きな関心の的となった。

次に今夏千葉工業大学隊が挑んだカンジュットサールの報告が、藤井正善隊長によって行なわれた。同隊は西面新ルートよりこのヒスパー山塊屈指の巨峰の登頂に成功したもので、ルートは雪崩の危険が多く、C1が雪崩に埋められる等のアクシデントにあいながらも、全員無事で頂上を勝ちとったものである。

午後10時より懇親会となり、あちこちの部屋でアルコール類を交えながら、話に花を咲かせていた。

29日は午前9時より12時半まで、多発する海外遭難事故にスポットをあて、山森欣一海外委員の

司会で松永敏郎氏をゲストにむかえ、また杉本忠男、角田不二両委員をパネラーとしてディスカッションを行なった。テクニカルな面からメンタルな面、また最近の日本登山界の傾向との関連性など幅広い面での話が展開された。11時からは松永敏郎氏が、特にヒマラヤにおけるザイル操作や転滑落の際の脱出技術などに的をしぼって熱っぽい講演を行なった。

午後からは、再び登山隊の報告となり、昨年困難な岩壁を突破して見事登頂に成功した東洋大学メルー登山隊の模様を大滝憲司郎隊長が8ミリとスライドを駆使して報告した。上部岩壁の登攀の様子は出席者の興味をひいていた。

最後に今秋、日本ヒマラヤ協会隊が初登頂したランタン・リの報告を中岡久隊員が、やはり8ミリとスライドを使って行なった。今では数少なくなった7,000m級未踏峰の初登頂だけに話題を呼んだ登山のひとつであった。

午後3時、本多昭一都岳連副会長のあいさつがあって閉会した。出席63名。

カングルー登頂

KANGGURU 7010m

岳友会ライフ&マウント

▲BC上部より見たカングルー

ヒマラヤへの第一歩

私たち、岳友会ライフ&マウント(L&M)は、今年で創立20周年を迎えた。20周年を記念して、ヒマラヤに遠征隊を送ろうという計画が持ち上がったのは今から3年前、1978年の秋だった。岳友会ライフ&マウント(L&M)は、当時会員15名、ヒマラヤを経験した者は居ても、会独自で遠征を行なった事はなかった。それだけに今回の計画は、20周年の記念行事としてはふさわしいものであった。

山の選定

7,000m台で登頂の可能性が高く、できれば初登という条件で幾つか候補を上げ、最終的に第1候補としてドルジェ・ラクバ(6,990m・未登・当時未解禁)、第2候補としてカン・グルー(7,010m・1955年ドイツ隊初登以後未登)を選んだ。ドルジェ・ラクバは、1976年に会員(小林他3名)が西稜のコルを越えた事があり様子が判っているし、未登である。ただ、許可が降りるかどうかわからない。カン・グルーは、山容から見て登頂の可能性は高そうであった。早速ドルジェ・ラクバの計画書をカトマンズのヤクホテルを通して、ネパールを通して、ネパール観光省に送ったが、返答

がない。79年春の新解禁峰のリストにも載っていない。この時点でドルジェ・ラクバは断念、目標をカン・グルーに絞った。

準備

メンバーは、最初10人がエントリーしたが、休暇などの都合で最終的に隊員6名、カメラマン2名となった。このうち隊員1名は、親戚付き合いの松本登高会の会員であるが、他はOBを含めたL&Mの会員である。隊長はヒマラヤ経験の豊富な小林(40)、副隊長は瀬木(39)と決まった。

80年プレモンスーンにカン・グルーに挑戦した弘前岳連には、山本が出掛けて、多くの資料を頂いた。中でも弘前岳連の紹介で、法大ラムジュン・ヒマール隊より頂いた、カン・グルー南西稜の写真は、ルート決定の決め手となった。その後もラムジュン隊の上総氏には、資料提供など多大の協力を頂いた。

食料は、C2以上は日本食、その他は現地食を使い事にした。現地食の調達、シュルバ、ポーターの手配などネパールでの仕事は、どの隊を見ても大変な作業である。私たちは、それを旅行社(マウンテン・トリップ社)に一任した。ネパール経

験者の少ない私たちにとっては、カトマンズでの日程短縮に大いに役立ったと思っている。

隊員会議は、原則として月に2回持つようにした。項目ごとに担当者を決め、担当者は原案を作り、隊員会議では全員で検討を加えるというやり方である。

準備作業は膨大なもので、隊員会議は、ほとんど真夜中にまで及んだ。

トレッキング

3月2日に本隊カトマンズ入り。先に来ていた小林隊長と合流した。装備、食料の購入とチェック、そして再梱包と、カトマンズの日程は忙しかった。しかしカトマンズ・トラベル（マウンテン・トリップの代理店）の機動力は大したもので、約900Kgの食料の調達、80人のポーターの手配は、準調に進んだ。我々がやったら、こうはゆかなかったに違いない。

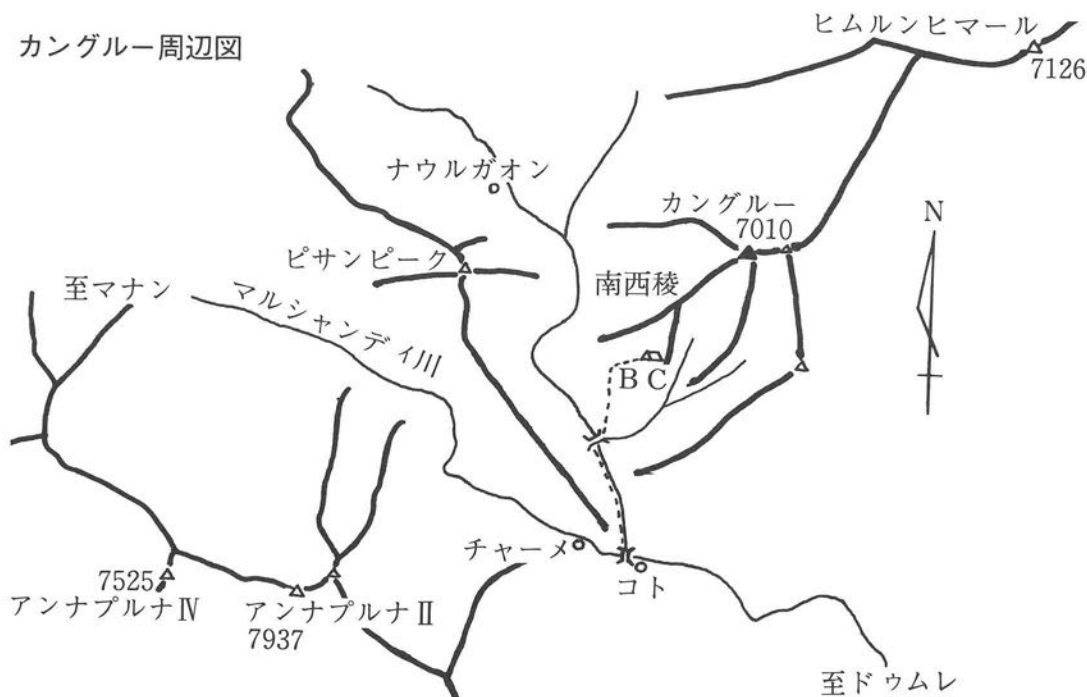
3月8日、キャラバンの出発である。カトマンズ・トラベルの大型バスに荷物を満載して意気揚々と乗り込む。隊員の中には、カトマンズに来てからまだ街に出た経験のないものも居るから、初めて見るネパールの風景は何でも珍しい。頂上まで耕やされた畑、道端で石を割る労働者、時折姿を

見せる白い山々……。ドゥムレに着いたのは、夕方6時頃だった。ポーターたちが集まっていて村は賑やかだった。ここからいよいよ本当のキャラバンである。

マルジャンディ川に添った村々は貧しいようだ。日本では家畜小屋でしかないような所に人間が住んでいる。キャラバンも数日経つと、楽しみが増えてくる。最初は、ネパール式のビスタリズムにとまどい気味だった隊員たちも慣れてきて、ポーターたちと共に、のんびりと歩く。茶屋に寄って、ミルクティーや、チャン（どぶろく）を飲んだり、ポーターの食事を食べたり。

3月16日、コトという部落に着いた。マルジャンディ川は、大分狭くなって、いかにもヒマラヤの内穂に入って来たという感じがする。ここで、道はマナン街道を外れ、ナウル・コーラ添いに入っていく。ナウル・コーラの入口は、200mはある垂直の岩壁が門のように立っていた。はじめてアンナブルナIIが白く輝く勇姿を見せた。コトから半日入った所に弘前隊の情報通り、カン・グルーに入る谷との出会いがあった。少し先のナウル・ガオンという村のポーターに道案内を頼んで、カン・グルー南西稜の末端と思われる尾根に登る。夏場はヤクを放牧する為に登る道がついていて、

カングルー周辺図



心配した雪もなかった。18日、3,800 m地点に、仮B.Cを設営。ここからはカン・グルーは見えない。19日、B.C予定地まで偵察したが、午後は雪が降り出した。22日、4,200 m地点にB.C設営。B.Cは、南西稜の中程の草原である。近くには、放牧用のカルカが2つあった。B.Cを作った頃は誰も居なかったが、登山が終る頃には村人が登って来た。彼らは時折テントに顔を見せては、薬をねだったりしていた。弘前隊のB.Cからは南西に1 km程寄っていると思われる。B.Cからの眺めは素晴らしい。北にカン・グルー、南には、壮絶なヒマラヤ巒を見せるアンナブルナIIとラムジュン・ヒマール、アンナブルナIV。

頂上へ

3月23日、B.C開き。どこから持って来たのか5~6mのポールが建ち、祭壇が作ってある。やがて、ラマ教の僧侶であったと云うリーダーと、第1シェルバのティリ、B.Cワーカーのアン・ブルバがお教を唱え始めた。何を言っているのか、全く判らないが、彼らの真剣な顔つきと、朗々と響く立派な声には、隊員も神妙になって手を合わせた。青く晴れ上がった空に、羽ばたくようなカン・グルーが美しかった。

南西稜は、写真で見たものと大して違わないようだった。ルートもキャンプ展開も計画通りにやれそうだ。先ずは一安心と云うべきか。

C1へのルートは、南西稜上のコルから、南東に派生した小尾根を辿る。ルート工作の必要はなさそうだった。10Kg前後の荷を背負って偵察を兼ねた第1回の荷上げは、しかし5,000 mに達するのがやっとだった。高度の影響は予想以上に大きい。

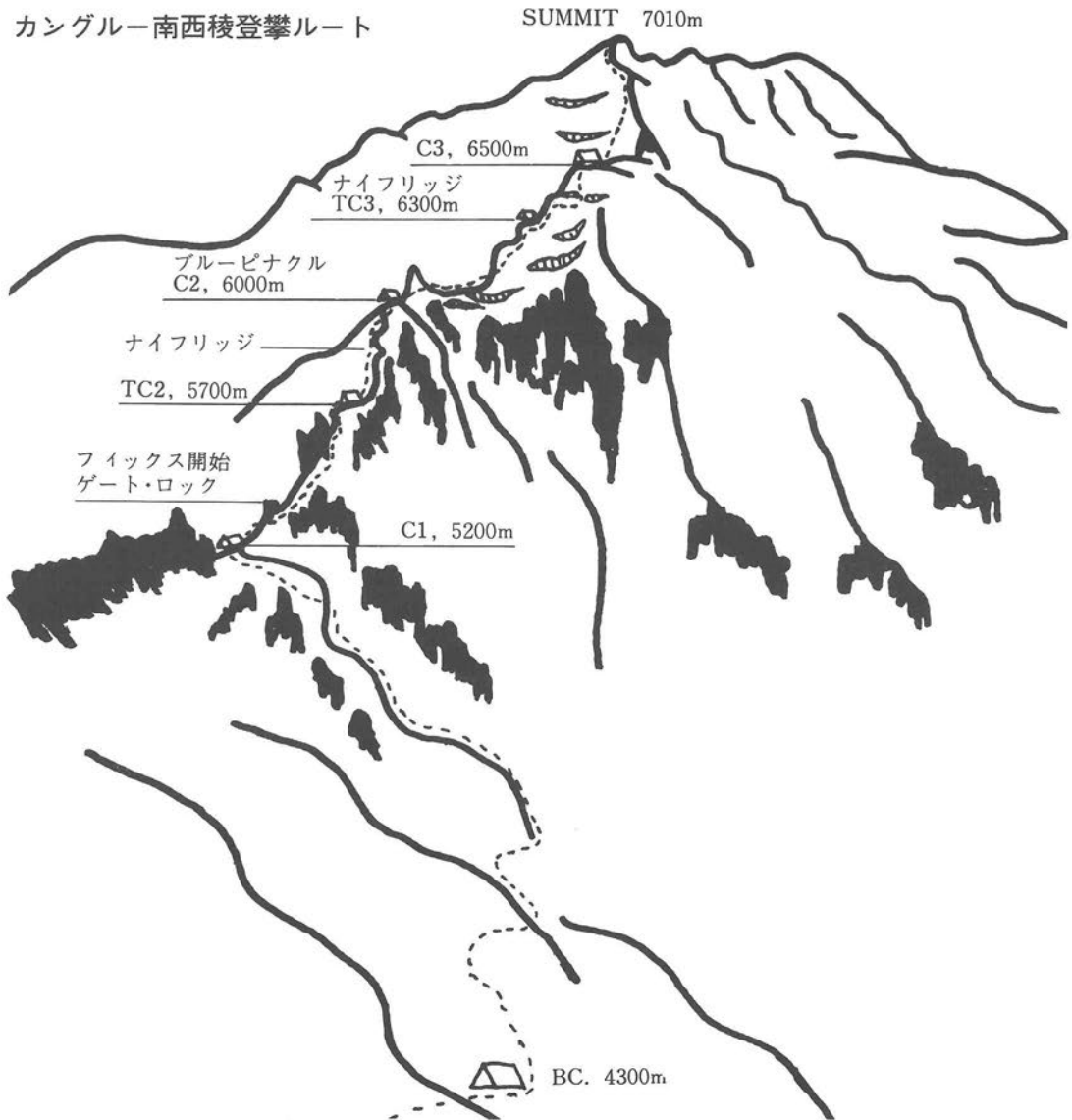
3月29日、5,200 mにC1建設。場所は、南西稜上の最大のコル。今日から、隊員はルート工作、シェルバは荷上げと、分担を決めた。荷上げに関しては、隊員はシェルバの足許にも及ばない。マナスルとその右にP29が顔を出した。私たちは、ルート全部にザイルを固定する積りで、ダンライン3,500 mを用意した。しかし、ザイルを張り出すと、とたんにピッチは落ちて仲々ルートが伸びなくなった。4月4日、5,700 mに達した

ところで、休養の為全員B.Cへ下った。

C1で連日頭痛に悩まされていた私はB.Cでとうとうダウンしてしまった。嘔吐を繰り返して3日間何も食べられなかった。高度の影響で胃をやられ、更に軽い肺水腫も併発したようだった。しかし和田ドクター(28)の適切な処置に助けられ1週間で前線に復帰する事ができた。後で聞くと、隊長は私を下の部落まで降ろす事まで考えたようだった。私と和田を除いた他の隊員は2日間の休養の後、再びルート工作に登っていった。しかしまたもアクシデント。C2へのルート工作中、村田(24)が、転んで胸を打ったのである。肋骨にひびでも入ったらしくて動けない。泣いて悔しがる村田をC1に残し、残る3人でルート工作は続けられた。仮C2(5,700 m)からルートはナイフリッジになり一段と厳しくなった。

4月9日、私たちがブルーピナクルと名付けた小ピークの肩(6,000 m)に達した。ここはかなり広い雪原になっていて風の当たらないよいテントサイトとなった。そこをC2とした。10日、小林が、まだB.Cに居た私の様子を見る為の下山、交替に和田がC1に上った。12日、やっと回復した私は小林と共にC1入りしたが、衰弱していた体はシュラフも背負えなかった。その間も上部では瀬木、山本にサーダーを加えた3名でルート工作が続けられていた。私と村田の2人の故障者をかかえて隊は最も苦しい時期であった。その為、本来登攀要員ではない和田も荷上げをしなければならなかった。C2から、ブルーピナクルの右をトラヴァースするのだが、硬い氷と切れ落ちた斜面に手を焼いてルートは伸びなかった。3日掛って、200mのトラヴァースを終え、コルに達した。ここで稜は大きく北東に向きを変えて、上部のプラトーに続く。幸いコルの底にはクレバスもなく、無事越えられた。コルの底にはクレバスがある事を予想して、わざわざカトマンズまでワイヤー梯子を取りにゆかせたのだが……。上部プラトーに続くリッジは見た目よりも長く難しかった。横に長いクレバスが走り氷も混ざっていやらしい。3日で上部のプラトーに達し、C3への荷上げを終える予定が、4日でやっと半分にも達しない。C3に荷上げを終えて、BCに下る予定を繰り上げ、

カングルー南西稜登攀ルート



17日全員B・Cに下った。隊員の疲労は極に達していた。連日安定していた天気は、朝から雲が払がっていたり、午前中に雪が降り出したり少しずつモンスーンの近づいた事を知らせていた。

久しぶりのB・Cは雪も解け、緑の草が顔を出し始めていたが、それにも増して隊員を喜ばせたのは岩淵兄弟の到着だった。隊員の下山にタイミングを合わせたようにこのカメラマン一行はやって来て、その夜は賑やかに語りあかした。

4月22日、登山再開。燃料、食料の残りが少なくなると1週間程のうちに決着をつけないと登頂は難しい。緊張と不安の入り混じった出発で

あった。C1、C2でそれぞれ1泊して、24日、瀬木、山本と私の3名が仮C3に入った。村田は肋骨のけがは良くなったけれど、風邪気味で仮C2止り。後で思えばこれが肝炎の症状の現れであったようだ。その後C2まで登ったが、様態は更に悪くなり、ついに26日下山。8度6分の熱でよく頑張った。肋骨のけがといい肝炎といい村田はついてなかった。仮C3は6,300m。雪の窪みに氷がかぶさっていて風は当らない。仮C3では瀬木快調、山本は不眠を訴えて精神安定剤を飲んだ。私は少し頭痛がしたが、体調は良かった。ルートはプラトー下のクレバスに達して明日はクレバスを



頂上に立った第一次アタック隊

右に巻いてプラトーに出、C3を作る予定だ。C3まで作れば、見通しは明るい。翌25日は快晴。瀬木と私でルート工作、山本はダンラインなどの荷上げ。5ピッチでクレバスの間に立った。約200m右にトラヴァースして幅の狭くなった所を越える。急な氷の壁を2ピッチ登ってプラトーに出た。6,500m。プラトーからは広い雪壁が頂上に続いていた。技術的に難しくはない。頂上はもう目の前だ。26日、吹雪の中、山本と私で6,700mまでザイルを張った。スノーバーはあと3本しかないから明日稜線までしかザイルは張れない。

第1次アタックのメンバーは瀬木、山本、私とシェルバ2名に決まった。小林と和田は1日遅れて第2次アタックに備えている。夕方6時の定時交信、「いかなる事があっても頂上を踏め」とトランシーバから隊長の言葉が流れてくる。全員気持ちは同じである。寒さも加わって、私もその夜は精神安定剤を飲んだ。明朝は5時の出発予定である。

4月27日、いよいよアタックの日。午前3時起床、5時15分出発。空は雲一つなく澄んでいる。昨夜の雪は20cm位か。このところ毎日ガスが掛って寝惚けたような顔をしていたマナスルが珍しくスッキリとした顔を出していた。このぶんだと今日1日天気は持ちそうだ。C3から雪壁を直登して稜線に達した所でスノーバーがなくなり、コンティニアスに切り替えた。私とサーダーのナワン、チョゴラン、瀬木、山本とシェルバのアン・テンバの2組で歩く。稜線は膝まで雪に入って歩きづらい。息は荒く足を動かす単調な動作だけをやっ

との事で繰り返す。無限と思える時間の中で突然サーダーの声「サクセス」。顔を上げると丸い雪の頂上が目の前にあった。11時20分、5人横に並んで私たちは頂上に立った。

翌28日も快晴。前日私たちと交替にC3に入っていた小林、和田、シェルバのティリが頂上に立った。

4月30日、全員B.Cに帰還。1週間振りに見るBCは更に春の気配が濃くなっていた。満ち足りた気分で眺めるカン・グルーは初めて見た時よりも優しく目に映った。1カ月の間、私たちが総力を挙げて闘ったとはとても思えない程、それは白くおだやかな姿だった。長く苦しかった私たちの闘いは終わった。

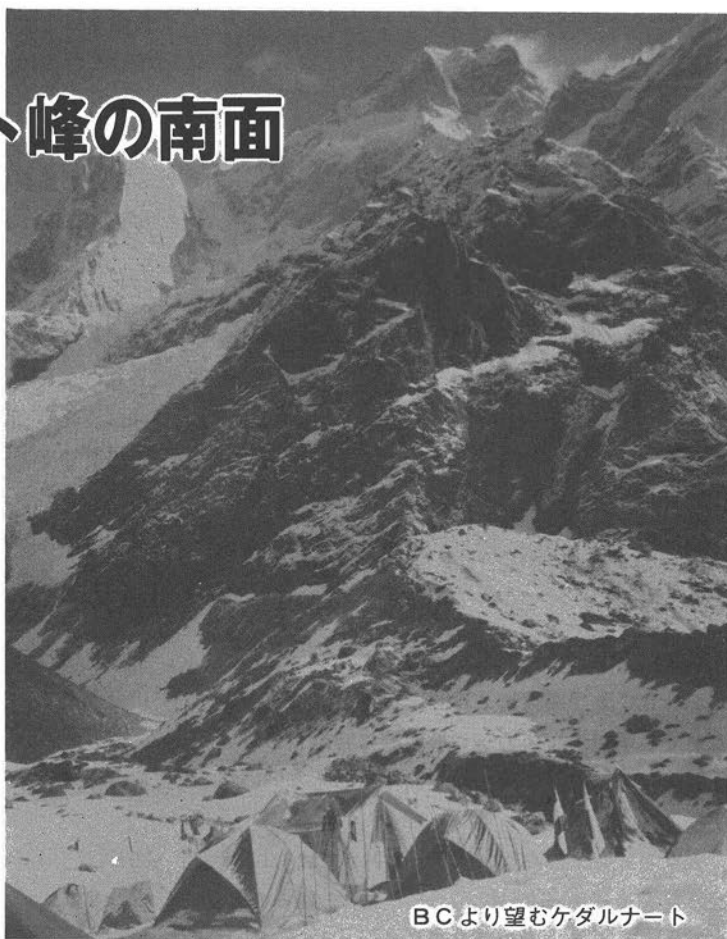
多くの幸運に恵まれて私たちはカン・グルーの頂上に立つ事ができたがそれは2年前、ヒマラヤ遠征の計画が持ち上った時から会員、OBを含めた全員の取り組みが見事に実を結んだ瞬間であった。(文責 杉田浩康)

隊の構成

隊長	小林昭一 (40)
副隊長	瀬木善近 (39)
登攀リーダー	山本大三 (38)
食料、会計	杉田浩康 (27)
装備	村田健治 (24)
医師	和田忠彦 (28)
カメラマン	岩淵世紀 (40)
＃	岩淵龍丸 (38)
サーダー	ナワン・チョゴラン
シェルバ	ティリ
＃	アン・テンバ
コック	ソナム
キッチンボーイ	ミンマ・ノルブ
B.Cワーカー	アン・プルバ
＃	スルザ

ケダルナート峰の南面

1981年5月の記録



東京アルコウ会

BCより望むケダルナート

ケダルナート (KEDARNATH) 峰はインドの首都デリーの北東約 300 km、ガンジス川をさかのぼり、ヒンズー教の聖地ケダルナートの北にそびえる標高 6,940 m の峻峰である。この山の南壁に私達「東京アルコウ会」は創立六十周年記念行事として遠征を行なった。

結果は約三分の二の 5,800 m までしか登れず、頂上稜線に抜け出る事が出来なかった。しかし、この地 (ケダルナート稜線の南面) で登山活動を行なった隊は外国隊を含めて現在まで他にないと思うので、私達の記録を紹介したい。

アプローチマーチ

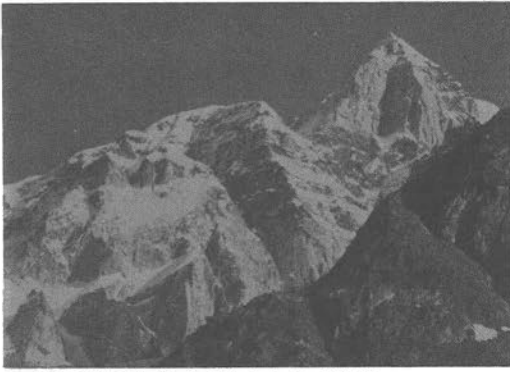
5月14日、チャーターしたバスに私達7名と連絡官の Pandey、コックの Tashi Lama、HP の Neal Chand、それにガイド2人が乗込みデリーを出発した。

連絡官は20才の学生で、私達に気を使ってくれたが、かえって注文が付けられる感じが強く登山中に口ゲンカする一幕もあった。そして彼が長身であった為に装備を日本から後発が持ち込んだり、

肉食主義者なので食物が私達と合わないなど苦労する事が多かった。

デリーから国道45号線を通り、リシケン (RISHIKESH) の清潔な宿に泊る。ここもヒンズー教の聖地でヨガ道場があり、外国人も修業に来ていた。

リシケンはまたヒマラヤの山々と平野部の境目でもある。翌日はガンジス川の上流へ向けて山の斜面の道を登る。途中の町スリナガル (SRINAGAR) で昼食をとり、JOSIMATH (花の谷で



▲ABC付近よりバルテクンタを望む

有名) 方面とわかれガウリクンド (GAURIKUND) に向う道に入る。山の斜面の細い道で、帰りには土砂くずれにあい半日足止めを受けてしまった。

この日はガウリクンドの巡礼者宿に泊る。そして翌日はケダルナートへ向けてのキャラバンが始まる。B.Cまで実際に2日間の行程しかなく、入山までの期間が短いのがこの地域の特徴である。反面、キャラバンの楽しさを長く味わえないのが残念であった。

ガウリクンドからケダルナート村までは約14km、この道をポーター34名ミュール4頭を雇って登った。また、もう一人のHPのSuranderも加わる。ポーターのうち約20名は山の反対側のガンゴトリのポーターを使用した。およそ6時間、はだしや、かごやミュールの上に乗った巡礼者達と共にケダルナートをめざして歩いて行く。

ケダルナート村の標高は3,581m、富士山の頂上に近い。お寺を中心に、お店や宿それに郵便局もある門前町である。周辺にはSadhu (修業僧) が住んでいる。私達は村の入口にある高級なホテルの庭にテントを設営した。翌17日、前日は雲におおわれ見えなかったピークが初めて姿を現わした。今までは写真だけであったが、実物を目前に見て登攀意欲がはつきりと感じられる。

B.Cは初め村から1日行程の所に置く事を計画していた。村からモレーンを登ると雪上の行進となり、はだしのポーターの歩みがあやしくなる。結局、モレーンを越えてCHORABARI氷河を2時間ほど進んだあたりの雪原上をB.Cと決め、ポーターにチップをはずみ荷を上げた。しかし、全

装備を一日で村から上げる事ができず、翌日も荷上げを行ないB.Cを完成させた。

BCの周辺

B.Cは標高約4,000m、ケダルナート峰の手前にある5,041m峰の麓の氷河上に設営した。ここは5月一杯は雪原で、6月になると岩石の原にかわり、小さなモレーンの反対側には小川が流れ草原があり、花が咲くようになった。

B.Cから上流を見て右側には、ケダルナートからバルテ・カンタと続く6,000m台の稜線がある。この稜線直下からの雪崩は4,000mの氷河上まで落ち、B.Cをめざして雪煙が近寄って来る。また、左側には5,000mの山々が連なっている。

氷河の最奥はコルになっていて、右へ岩稜がバルテ・カンタへ上がっている。バルテ・カンタからの岩稜はケダルナート南壁の登攀とは異なった山登りが楽しめそうである。

登攀活動

B.Cから約1時間ほどで南壁の取付、懸垂氷河基部のABC (約4,200m) に着く。ここにB.Cを設営するのが妥当と思われるが、入山時期が早い場合、登山隊になれていないガウリクンドのポーターをうまく利用できるかが問題になると思う。

ABCから懸垂氷河の中央に取付き、右上して5,041m峰とのコンタクトラインを登る。懸垂氷河の中央は、落石や雪崩、クレバス等が多く、ここをルートとするには危険がありすぎた。私達の登ったルートは4,600m付近にある氷瀑 (約150m) 以外には特に問題となる所はなかった。ここは、午後や降雪後に上部の5,041m峰の斜面からの雪崩が集まり通過するので注意しなければならない。この上は広い雪面となり、天気の良い日には日射熱で苦しむ事になる。

CIは懸垂氷河を登り切った約4,900mの所に設営した (5月30日)。ここはプラトーと懸垂氷河の境目のセラック上に雪が積った場所で、設営してから約3週間の間テントの下に割目が入るなどの変化はげしかった。

C Iの先は横断に45分程必要とする
 プラトールになっていて、その上にケダル
 ナートの稜線から頂上岩壁・上部雪田・
 中間岩壁・雪稜・三角岩壁その下の雪壁
 と連なり南壁の核心部を構成している。
 プラトール上は右側の6,000 mの壁から崩
 壊したブロックの塊がころがっている。

三角岩壁へは約200 mの雪壁の登り、
 そして200 mの岩壁を、取付の垂壁を人
 工登攀で越え、その後バンドを利用し逆
 「く」の字形に登る。岩壁の左側の雪壁
 もルートとして考えたが、雪崩の通路と
 なってしまっている。もっとも、岩壁の
 ルートも上からの雪崩が右に左に落ち、
 そのたびに雪煙をかぶる始末だった。

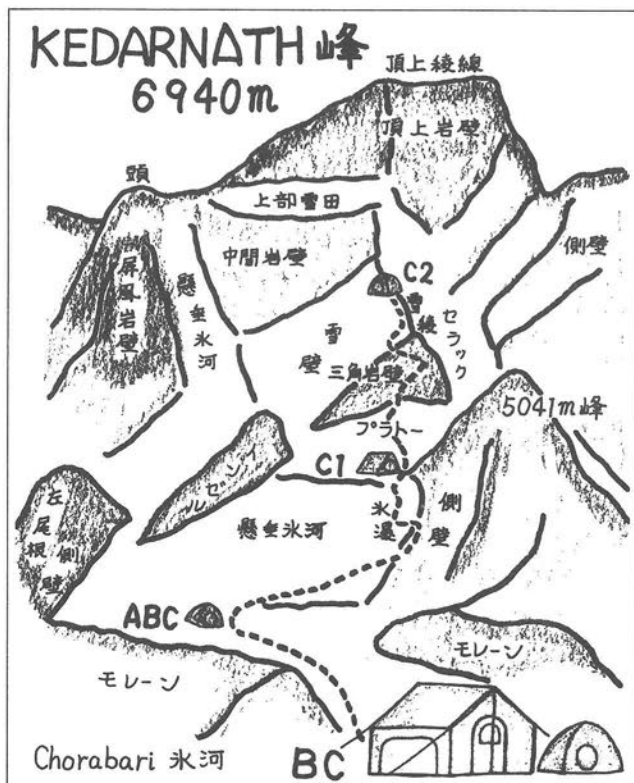
三角岩壁の上は不安定な雪壁をトラバ
 ースぎみに登り雪稜に出る。そして岩壁
 を終了してから約600 mで、中間岩壁右
 端の下のC 2設営地点に着いた(6月13
 日)。C 2地点(約5,800 m)は水の上
 に雪が約30 cm付いた雪稜で、カッティ
 ンでテントを張るスペースを作るのに4日
 間を要してしまった。

これより先のルートとしては、中間岩壁を右に
 まわり雪壁を上部雪田に登り、これを左にトラバ
 ースして頂上岩壁左端を稜線に上がり、そして右
 に頂上をめざす事を考えていた。

しかし、すでにこの時、登山計画を10日間ほど
 遅れており、技術・安全上の点でHPを三角岩壁以
 上で使えないのが私達の負担となっていた。そして、
 C 2設営後の2日間の降雪、さらにモンス
 ーンの接近は登山活動を終えるのに十分な理由とな
 った。

6月20日C 1からの荷下げ、21日に全員BCに
 集合した。28日BCよりガウリクンドまで下山、29
 日行きと同じバスで雨の中をスリナガールに着く。
 翌30日にデリーにもどった。

IMFへの報告、今後のためにインドに残して
 おく装備と日本に送り返す荷物の準備と通関を終
 え、全員インドをはなれた。



おわりに

ケダルナート南壁をめざした私達は、南壁核
 心の頂上岩壁・雪田・中間岩壁に手をふれる事な
 く帰って来てしまった。しかし、山を眺めながら
 考えた事は、必ず登れるという事であった。そし
 て、ヒマラヤ登山が単に登頂するだけでなく登り
 方が問われる現在、デリーから4日間で入山でき
 るこの地域の山は少人数の速攻で登るのに適して
 いると思っている。

ケダルナートの南壁とバルテ・カンタの岩稜、
 この二つはそれぞれ異なった登攀が楽しめる。今
 考えているのは、力を付けて二、三年のうちに再
 びこの場所に行く事である。(前田文彦)

〈隊の構成〉

隊長 星野通明 (36)、隊員 前田文彦 (26)、
 斉藤和雄 (29)、三浦利一 (25)、竹内雅雄
 (22)、西藤謙 (33)、江黒健太郎 (22)

インド領カラコルム その2

マモストーン・カンリ、他

稲田 定重

インド、中国、パキスタンの国境が接するところ、インド亜大陸と中央アジアの接点、カラコルム峠(5570m)は、大ヒマラヤの中でも特に行ってみたいところのひとつである。

1558年、シナ・トルキスタン王ミルザ・ハイダルが越えて以来、東西のキラ星の如き探検家がこの峠を越えている。峠の頂上にはその名の由来となつたといわれる黒い石があるという荒涼たる峠。ラダックのレーを起点にカルドゥン・ラを越え、ヌブラ河をさかのぼりサセール・ラカサセール・ブランサに出てシャイヨーク河に下る。そしてカラコルム峠を越えて遠くヤルカンドに達する道を想うだけで胸の高鳴りを覚えるのである。いつの日かこのルートがオープンされたとしたら大ヒマラヤを越える最もすばらしい道として多くの人を迎えることになる。マモストーン・カンリはこのルートの途中にある巨峰である。

マモストーン・カンリ

“千人の魔”の意味を持つマモストーン・カンリは1860年代に測量された。シャイヨーク河の右岸、サセール・カンリの北西にあり、南にマモストーン氷河、北にチョング・クムダン氷河が位置する。「クムダン・グループ」に属し、サセール・カンリ山群とはサセール・ラを隔てて対する。

1907年、軍事的使命を帯びて西域に入った日野強中佐は、カシュガルからカラコルム峠を経てサセール・ラを通過し、レーにたどり着いた。著書「イリ紀行」には詳細な日誌と地誌が載っている。「……南下2里余、印度河(注、インダス河)の上流に出づ、水浅くして渡河容易なりき。

次で急坂を上りてセシル嶺北の中腹に暮嘗す。…5日……10時25分セシル嶺の頂上に達す。」と記している。“セシル嶺”は、サセール・ラのことであるがこの峠を越えた日本人は外にもいる。

1909年の第2次大谷探検隊の橋瑞超と野村宗三郎である。彼らはマモストーン氷河舌端近くを通っている。しかし、マモストーン・カンリに関しての記述は見られない。20世紀初頭に早くも日本人がこの地に足を踏み入れたというのは何とすばらしいことではないか。

1839年、P.ヤングはマモストーン氷河の入口に達した。1907年、D.G.オリバーがこの氷河を探索した記録がG.J.に出ている。

1909年にT.G.ロングスタッフは東部カラコルム一帯の広域にわたる氷河探索を行ないマモストーン氷河も調べた。G.J.に「Glacier Exploration in the Karakoram」を発表している。

パキスタン側から東部カラコルムの山の許可が取得できるようになり、わが国からも幾つかの隊が国境(停載ライン)付近の山に入っている。けれど、内外ともに西面以外からの写真は未見である。

西面からこの山を最も良くとらえているのは、1978年の鶴城山岳会隊である。ギョン・ラ(Gyong La 5700m)からのパノラマの中にボリュームのあるマモストーン・カンリが出ている。また、サルトロ・カンリ隊、静岡大のテラム・カンリからの写真もある。残念ながら遠望でありルート特定することはできないが三角形をした大きな山である。

シャイヨーク河、特に右岸からは多くの水河が流入している。この付近の水河の流動は活発なようで度々シャイヨーク河をせきとめ天然のダムを形成している。水河ダムはやがて決壊して大洪水となり下流の村々に甚大な被害を与える。チョング・クムダン氷河のダムは有名で、1926年10月末には大洪水をもたらしている。1928年にも上流5マイル以上にわたって大湖水を出現させ翌年決壊している。決壊前(写真参照)、決壊後のダムや下流での増水状況などが、H・JのVo1-IIにJ・P・ガンによって詳細に報告されている。

マモストン・カンリへは、チョング・クムダン氷河からもルートをとれるが南面のマモストン氷河が最も落ちついている。

アプローチは、スリナガルからレーに至り、ラダック山脈の峠(カルドウン・ラ)を越えてシャイヨーク河に下る。ヌブラ河をさかのぼり、別れてサセール・ラへの道をとるか、アッパー・シャイヨーク河に沿ってサセール・ブランサに至りサ

サセール・ラを越すことになる。

ヌブラ・シャイヨーク両河とも6~8月の間は増水が著しくキャラバンは難渋する。早い時期に入って本格的増水の始まる前に登山活動を終えるのがベターとなる。秋は9月以後に減水する。レーまで空の定期便が入っているので早春のゾージ・ラの雪の問題はクリアーできる。

現在、カラコルム全域を通してこの山は屈指の未踏峰であり同時に最も知られていない山である。

マモストン・カンリ周辺の山々。

南リモ氷河とマモストン・カンリとの間には殆んど探られていない6,000mから7,000mの山が多くある。

チョング・クムダン氷河をとりまく山では、7,004m峰、7,071m峰をはじめとして6,500m以上の幾つかのピークが見られる。豊富な雪をまとった重量感あるピークである。氷河の流動は激しいようである。1914年にデ・フィリップ隊により測量されている。



▲マモストン・カンリと印・パ停戦ライン付近「岩と雪」付録図(宮森常雄作成)



チョング・クムダダムとヌブラ川右岸の山々 (F.ラッドロー, H.J.Vol-11)

シエルカール・チョルテン氷河と南リモ氷河の間の「シエルカール・グループ」にも6,529m峰を頭に6,500m峰が幾つか見られる。1912m、フィッサー隊がシエルカール・チョルテン氷河を擦査している。この付近は氷河が広範に発達しているためルートはとり易いだろう。

南リモ氷河の北、停戦ラインの東側でカラコルム峠までの間は高度を減じており、数座の6,000m峰が見られるだけである。1914年のデ・フィリップ隊が擦査している。

南テロン・グループ他

停戦ラインからマモストン氷河の間の山群には6,773m峰の他、6,000m峰が数座見られるがピークナンバーの付いた山はない。

シアチェン氷河の手前、ヌブラ河上流左岸にストングステッド(Stongsted 6,014m)がある。大カラコルムからははずれるが地理区分上のサルトロRangeに属するチュルング(Chulungグループ)にはD52(6,826m)を最高峰として幾つかの6,000m峰がラ・ヤグマ氷河流域にある。この主脈はシャイヨーク河との合流点までのび、6,161m峰までの間に6,000m峰数座を連ねている。

いづれも登山を目的とした記録は見当たらない。

1960年、インド陸軍隊がアブサラサス山群

に入った記録はいささかショッキングであった。アブサラサスは、伝えられる停戦ラインより西側にあり、パキスタン領として(中国との国境上)認識されていたからである。

1976年にはるかなキャラバンの未だ初登頂を果たした大阪大学隊ももちろんパキスタンの許可により入域しているのである。停戦ラインはシアチェン氷河の舌端を通っている。(地図参照)

インド隊は、アブサラサスの最高峰“7,131m”に登ったと記している。最高峰は7,245m(I峰)であるが、AAJのA・カーターは山群の他のピークに登った可能性も示唆している。

彼らは、レーをスタートしシアチェン氷河に達しアドバンスベースキャンプをテラム・シェール氷河とロロフォンド氷河、シアチェン氷河の合流点5,182mに置いたという。9月18日午前11時に8名、同日午後6時15分に第2次隊7名が登頂している。

先般、HATの招請で来日したインド登山財団総裁サリーン氏とこの付近のオープン問題について話をしてみた。IMFとしては、登山の立場からできるだけ多くの山を開放したい意向だという。しかし、その権限はIMFにはない。高度の政治レベルの判断になる。この地域のオープンのカギを握っているのは、中国、インド、パキスタンを主軸とする国際政情にある。ラダックには大軍事基地があり、精鋭といわれるパラシュート部隊も駐屯している。インド北西辺境の情勢は厳しい。

VISIT TO HIMALAYAN CLIMBING TEAM ②



金子利三氏



五味秀一氏



小原紳一氏

東京都庁山岳部ネパール合同登山隊 (オンミ・カンリ 7028m ?)

出席者 金子利三(隊長) 鈴木道子(隊員)
小原紳一(隊員) 五味秀一(隊員)

● 聞き手 尾形好雄



鈴木道子氏

黒部からヒマラヤへ

— 今、都庁山岳部は何名ぐらいおるんですか。
金子 0・Bも含めて80名ぐらいですかね。そのうち、日頃山へ出かけているのは15人くらいです。
— 創立50周年とお聞きしましたが、職域山岳部としては随分古い歴史をお持ちですね。
金子 そうですね。古さだけは。中身は薄いですが。
— 都庁山岳部と云うのですから一つの職域山岳会だと思っておりますが、どう云った人達がお集りですか。
金子 都庁勤務者だけと云うものではなく区役所や国の社会保険事務所など都庁の関係機関に勤める者もおります。
— 以前は黒部周辺に精力的に入られていたように記憶しているのですが、あれは地域研究的なもので取りくまれてたのですか。
金子 別にそういう訳ではなく、あそこしか思いつかなかったからではないですかね。うちは委員会制で今、私が委員長をやっているのですが、街の山岳会のチーフが2年ぐらいでどんどん交替していくと聞いてますが、うちは前の委員長は5～6年やりましたし、かなり長いんですよ。だから一人の時代が5～6年続きますとかなりの事が出

来ちゃう訳です。

— 最初は剣と云うことでスタートしたんですよ。大雪のあった昭和43年のあと剣の三年計画で小窓尾根を目標にしてはじめてたんですけど、一応それが終ってマッキンレーに行っただけですがね、次どこをやるかと云うことになって、まだあそこは小窓尾根だけでなく、やる所が沢山あるからやってくるうちに黒部の川の方まで広がってきたということです。

— マッキンレーに行かれたのは、いつでしたか。

金子 '72年です。

— そのあとバツラは '77年でしたか。

金子 そうですね。'75、'76年と二度偵察にも行ってます。

— それらの偵察行は、いずれもバツラに照準を合わせてですか。

金子 そうですね。当時は残されている一番高い山でしたからね。

— そうしますとオンミ・カンリはバツラの後と云うことになりますか。

金子 そうですね。5年振りです。

ランタン・リを計画したが……

— 今年の夏頃はリンク・サールの計画があったように記憶しておりますが。

金子 はい、昨年の夏頃から 82年には海外へ出ようと云う声があって、その山選定の最前堤が7000米の未踏峰と云う事でした。今年ネパールは解禁になりましたが、その頃はネパールにないんであとはインドかパキスタンしかないんで必然的にパキスタンになって申請書まで出したんです。昨年のうちからランタン・リへ行きたいと云う話があったんですが、僕らは情報網も少なく、ランタン・リはいつオープンされるか判らなかつたので取り敢えずパキスタンと云う事で計画したんですけど。いきなり今年解禁されちゃったもんでそれじゃうちもランタン・リを出そうと云う事だったんです。

— それではリンク・サールを止めてと云う事ですか。

金子 そうですね。

— そのランタン・リも残念ながら登れなくなっちゃったと。

金子 そうですね。本来なら我々が計画書を出した時点では他に割り込む余地はなかつたんですけど。何故か登られちゃって……

— ランタン・リの計画は随分前からあったんですか。

金子 うちの場合、岩登りの個性が良いとかと云うのではなく皆の力で何かをやると云うところなので、例えばガウリサンカールの様な山では歯がたたないし、ランタン・リなんか7000米もあるし、行きたいなあと思っていました。

小原 ランタン・リはかなり前から計画の段階からあったんですが、解禁されていないと云う事で諦めてたんです。

— 前回がカラコルだったから、今度はネパールと云うこともあってですか。

金子 そうですね、あんなガラ場よりも緑のネパールへ行ってみたいと思いますしね。

— オンミ・カンリを選ばれた選定理由なども、その数少ない7000米の処女峰と云うことですか。

金子 そうですね、かえて今、オンミ・カンリに変更出来るのは休暇の面では難かしいのですがランタン・リよりもほんのいくらかでも未知なところと云うことで喜んでおります。

— 休暇の問題はやはり戦域山岳部だけあって難

かしいですか。

金子 そうですね、今、国でも行政改革なんて叫ばれており都でも人減し人減しと云われている時だから非常に今は難かしいですね。

— でも皆さん休職と云う形で行かれるんですよ。

金子 いえ、休職と云う扱いはないんですよ。

— それではどういう形で……

金子 まあ、良い上司についた運の良い奴は欠勤ですけどね。私事欠勤扱いが一番運の良い奴です。

— 費用の方は、全て個人負担ですか。

金子 そうです。一人120万を覚悟してもらってます。(総経費1200万)

— オンミ・カンリは合同登山隊にのみ許される山だと思いますが、合同の相手先はどこですか。

金子 NMAです。

— NMAとの合同では、この秋の登山隊などいろいろと苦労があったように聞いておりますが、どなたか渉外要員として現地に派遣されてるのですか。

金子 いえ、全部エージェント任せです。

— エージェントはどこですか。

金子 「ネパール・トレックス&ナショナルヒストリー Exp」と云うところですよ。余り日本では知られてない会社です。

— ネパール側隊員は何名ですか。

金子 3名です。

— 先発の方はいつ頃出発の予定ですか。

金子 いえ、先発は出さないつもりです。その前の渉外関係は全部エージェントにやらせておこうかと思ってます。

— そうするとNMAの推薦状などもすべてエージェントでやって貰うと云う事ですか。

金子 そうです。

— この秋の登山隊はNMAの推薦状問題で苦労したと聞いておりますが。

金子 うちのエージェントは余り苦労したとは云ってありませんでした。

バツラの二の舞は避けたい

— タブレジュンまでは飛行機ですか。

金子 そうです。

— キャラバン・ルートはどうなんですか。

金子 タムール川を源流まで遡ってヌブチューの裾をまいてオンミ・カンリの南面に入ります。タブレジュンからBCまで8日間を予定しています。

— 登攀予定ルートはどこですか。

金子 一応その南稜を予定しています。あるいは観光省で交渉出来ればこの北西稜の方から登るようになるかも知れませんが、写真の感じではその南稜みたいですね。

— この南稜自体はどう云う稜なんですか。

金子 どばっとした雪の尾根みたいですよ。

— 南稜への取付きはアイス・フォールなんかがあるのですか。

金子 それは判りません。まだその氷河の写真が全然手に入らないんです。

— タクティックスについてお聞かせ下さい。

金子 一応、前進キャンプを四つ出し、オーソドックスな極地法でやりたいと思います。それに我々ヒマラヤの高度を経験するのが初めての者が多いので3日に一度の休養を考えてます。

— メンバーの方で、バツラに行かれたのは金子さんだけですか。

金子 副隊長の中村幸太郎も行っています。

— 残りのメンバーの方は皆さん初めてですか。

金子 はい、初めてです。

— このシェルパ1名と云うのはサダーだけですか。

金子 はい、そうです。

— 往路キャラバンのローカル・ポーターは何名ぐらいですか。

金子 65名ぐらいを予定しています。

— そうしますと国内からはどのくらい持ち出すのでしょうか。

金子 国内からの持ち出しは1.3tを予定しています。

— タブレジュンからキャラバン開始となると、隊荷もタブレまでは空輸ですか。

金子 最初はツイン・オッター機が飛べると云う情報だったんで、その予定でしたが、まだその辺は解決してません。

— 登頂予定はいつ頃になりますか。

金子 5月の下旬に全員登頂を考えてます。

— 酸素はいかがですか。

金子 医療用にボンベを2本、それと各キャンプに緊急用としてO₂バックを備えようと思っています。少し金がかかっても安心であることにこしたことはないですからね。

— 何かタクティックス面で変わった点などはありませんか。

金子 ありません。この前バツラで一人殺していますから、目新しいことをやるよりも登ってこなくてはと思っています。

— あれは雪崩でしたか。

金子 そうですね。

— 小原さんは今回初めてと云うことですがどうですか。

小原 一回はヒマラヤへ行ってみたいと云う気持は少し前からあったんですけどね。2~3年前までは行こうと云う考えは無く、ただ行ってみたいなあと思った気持でした。僕なんかは余り岩登りが得意じゃないんでそう云ったものが出てこない山がいいなあと思ってました。まあ、ネパールはいろんな人の話を聞いたりして日本の山に自然が近いと云うような事ですごくいいなあと思ってます。

— 五味さん抱負を聞かせて下さい。

五味 私にとってはやはり高さで云うものが一番ですね。どこまで自分がやれるかと云うことで、やはりヒマラヤは一度は行ってみたい所ですね。

— 鈴木さん、紅一点の参加ですがいかがですか。

鈴木 大した抱負もありません。

— それで職を辞めてまで行くのですか(笑い)。

鈴木 そんなだいそれたものはないんですけど……

— やはり尽きせぬ憧れのようなものがあるからですかね。

鈴木 そうですね。単純な理由だと思います。

— 最後にオンミ・カンリに賭けた隊長さんの抱負をお聞かせ下さい。

金子 べつに……行けば登れるんじゃないかなあと思っていますから。然し、バツラの二の舞だけはしたくないですね。

— 本当に今日はお忙しいところありがとうございます。頑張ってきて下さい。

— 12月17日 小田急9Fにて —



キングドン・ウォード(1)

水野 勉

「花を求めて」の項はもう少しづけて、キングドン・ウォードを2、3回書き、その後にしめくりを書いて、20回ぐらいで終る予定でいた。しかし、キングドン・ウォードのことになると、花というばかりでなく、地理についても調べてみたいし、項をあらためて書いた方が自分としても気分が落ち着くので、「花を求めて」は前回で終ることとする。けれども内容からいえば、つづきである。

フランク・キングドン・ウォードは植物採集者としては最大の人物であろう。今後においても、この分野でかれの業績をしのご者が出る可能性はまずあるまい。

植物採集者はそれぞれ自分の好みの方法で仕事をやっている。いままでにも述べたように、フォレスト、ロック、ウィルソンなどは、量的に採集しようとした。四季をつうじて、できるだけ広範囲にわたって採集をしようとした。キングドン・ウォードはちがっていた。ファーラーもそうであったが、かれ独自のやり方をした。かれは自分が採集した植物がじっさいに育つのを自らの目で見た。そして、秋になって、またそこへ戻り、種子を採集した。たまには、ヨーロッパ人の同行者がいたが、ほとんどいつでも、かれの採集はかれ自身でおこなわれた。

この方法はたしかに利点があった。採集者自らがその目であらゆる植物をそのあるべき場所で見ることができた。したがって、その環境、条件などについて明確な認識を持つことができ、フィールド・ノートに正確にそれらを記入することがで

きた。現地人などに採集をさせるものには、とてもマネのできないことであった。かれが採集した種子が、花の咲いていたときに自分がその場所で特定した植物のものであることを、よく知っていた。もし、誤りがあったら、それはすべて自分の責任であった。たまには道路ぎわにあったから採集したというような、現地人のやり方が混じる恐れはまったくなかった。

不利な点は、一人の採集者がカバーできる地域はごく限られてしまうことだった。また、種子を採集するばあいでも、同時に何か所には行けないことだった。

フランク・キングドン・ウォードの父は、ハリー・マーシャル・ウォードといって、1896～1906年、ケンブリッジ大学の植物学教授であった。その前の10年間は、クーパーズ・ヒルにあった。王立インド工科大学の植物学教授をしていたので、キングドン・ウォードは、子供の頃、インドやビルマから帰ってきた森林監督官などにしばしば会っていた。感受性の強い年頃に、かれはブラマボトラその他アジアの大河のロマンにみちた話をかれから聞いていた。かような植物に関係の深いふんいきにかこまれて、かれが植物採集に興味を抱くようになったのは、当然といえるであろう。

キングドン・ウォードはケンブリッジのクライスト・カレッジに入り、自然科学を学んだ。そして、1907年には早くも、3年契約の教師として上海へ行った。しかし、2年後には、マルコム・P・アンダーソンとともに、中国内部の旅行1909年—1910年の旅行に出発した。

1911年には、リヴァプールのビーズ苗木生育

会社がウォードを雇い、北西雲南へ遠征をさせることになった。その会社はまたジョージ・フォレストを送り出したところだった。これ以後のキングドン・ウォードは中国西南部、ビルマ北部、アッサム北東部、チベット東南部など、揚子江、メコン、イラワジ、サルウィーン諸大河の上流地域への遠征につぐ遠征の連続であった。かれは1958年に72才で死んだけれども、その生涯はまさに探検家の名にふさわしいものだった。かれが旅行をした地域は当時であってももちろん世界でももっとも知られていなかった地域であったけれども、現在においてももっとも知られざる地域なのである。かれはもちろん第1の目的は花を求めての旅行であったけれども、かれの関心は地理や高山に対しても向けられた。

キングドン・ウォードは1885年11月6日に生れ、1958年4月8日に死亡した。その72年間の生涯のうち、1909～1957年の48年間というものとは全く旅行で埋まっている。かれの踏破した地域の探検家としては、ジョセフ・ロック、ギル、エドガー、ニーダム、ベイリーなどがあげられるが、その足どりの広さ、おとずれた回数、報告の精密さなどからいって、キングドン・ウォードが第1人者であろう。かれは多くの植物学的業績以外に、ブランク地域であった地図上に多くの地名や等高線を加えていった。王立地理学協会は1930年に、ファンダーズ・ゴールド・メダルを贈り、王立スコットランド地理学協会は1936年にリビングストン・ゴールド・メダルを贈って、その功績を表彰した。

かれは若くして遠征をはじめた。かれが1人で戸外にキャンプしたのも、ほんの少年のときであった。それ以来、野外生活への愛、自然への深い関心を生涯抱きつづけた。勇気、決断力、仕事に対する烈しい情熱などを持ち合せていると同時に、慎しみ深さをも持合せていた。派手な性格であったら、あのように地味な探検を50年近くもつづけれなかったろう。

次に少しわずらわしいかもしれないが、その遠征の足どりをたどることにしよう。

1909-10 西部中国（上海から南部甘肅経由で打箭炉へ）

これは前述したように、P. アンダーソンと同行した旅行で、厳密にかれ自身の旅行とはいえないが、最初の旅行としてかれに与えた影響は大きい。甘肅から四川へ下り、成都、打箭炉、それから峨眉山にのぼり、揚子江を下って重慶へ、それから上海へと戻った。

1911 ビルマ北部とチベット＝ビルマ北部のバーモを出発して、雲南の騰越、大理、維西、メコン川沿いのツェクからアトンツェ、それからドケル・ラ経由でメコン川に戻り、アトンツェまでさかのぼり、それから北東へ向い、揚子江沿いのモティンへ、西へ向ってツァーレイへ更に北へ行って巴塘へ、更に同じルートをたどってチベットのガルトクへ行き、それからまた南西へ向ってメコン川に出て、メコン川を下り騰越へと戻った。

1913 雲南とチベット＝ミチーナ、大理、麗江、中甸高原、アトンツェ、ドケル・ラなど経由で、カグルブ、白鎧山をとおって、メコン・サルウィン分水界のチベット側へと北東へ向い、サルウィン川を下って、サルウィン・マイファ両河分水界を越えて、タロン川（マイファ川上流）へ出て、ビト峠をとおりアトンツェへ抜けた。

1914 北部ビルマ＝ミチーナ、ピーモー、フェンジュヴェリン、イマラ・ブム、ウラウ峠、シンルブ・チェト、フォルト・ヘルツとたどり、ミチーナへ戻る。

1919 北部ビルマ＝イマウ・ブム、ピーモー。

1921 雲南と四川＝大理、麗江、ユンニン、ムリと四川へも入り、騰越、バーモとたどった。

1922 雲南、四川、チベットおよび北部ビルマ＝バーモ、騰越、大理、ユンニン、ムリ、麗江、カリ峠、白鎧山、アトンツェ、ヤコロズ、それからメコン・サルウィン分水界を越えて南西へ向い、チャムトンへ、ゴムバ・ラをとおってタロン川へと抜け、タル・トラをとおってナム・タマイ川（マイ・ファ川の支流）へと抜け、フルト、ヘルツ、ミチーナへと戻った。

1924-25 東部ヒマラヤと南部チベット＝シッキム、ファリ、ギャンツェ、ツァンボ谷、ツァンボ・ゴルジュ、ブータン、インドというルート。（つづく）

■ 寸 感 ■

今、1981年の大晦日を目前にして、2月号の編集後記を書いている。季節感覚のズレは月刊誌編集者の宿命で、今さらどうということもないが、しかしこの1981年という年、実に苦渋に満ちた忘れられない年であった。また同時に無我夢中の一年でもあった。ひとつのことに夢中になるというのは確かにすばらしいことであろう。しかし、より大なる発展のためには、己の目標以外のことにも神経が行き届いていなければならない。今年ヒマラヤへ出かけられる方、特に若い方はそのことを心して山に向って欲しいと思う。確実な登山はそういう姿勢の中から生まれてくるものだ。これは登山のみに限ったことではなく、人生のあらゆること、また対人関係においても言えることだろう。かく言う筆者も、夢中になると周囲が見えなくなってしまう性格だが、先日、苦悩の中にあつた私にある人がこんこんと悟してくれた。私よりも少し若い人だが、胸に響いたその言葉を大切にしたいと思っている。1982年こそは明るい年にしたいものだ。(角田)

事務局日誌 (12月)

- 5(土)～6(日) 日本ヒマラヤ会議高知会場開催
6(日) ナンダ・カート捜索隊帰国(先発)
広島ヒマラヤ集会開催
7(月) 長崎ヒマラヤ集会開催
12(土) ナンダ・カート捜索隊帰国(後発)
20(日) ナンダ・カート捜索隊報告会、同追悼式(於東京・岸記念体育館 503号室)
25(金) 1982年登山学校(クン7077m)インストラクター会議(土居、稲垣、角田)
28(月) 事務局御用おさめ

ヒマラヤ No.123 (2月号)

昭和 57 年 1 月 10 日印刷 57 年 2 月 1 日発行
発行人 柴田 金之助
編集人 角田 不二
発行所 日本ヒマラヤ協会
〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号



インドヒマラヤを日本語で!!



UNITED TRAVEL SERVICE(P)Ltd.

■インドヒマラヤ全域のアレンジをすべて日本語でひきうけています。本社にも東京事務所にも日本語に堪能なスタッフが多勢おります。

■許可取得から通関、隊荷輸送、ポーターアレン

ジまで、遠征・トレッキングのすべてを取り扱っております。

■詳細は東京事務所のサニーまでお問合せ下さい。もちろん日本語で!!

東京事務所 〒141 東京都品川区西五反田2-23-11-202 電話 03-493-4920

本社(デリー) 802 Nirmal Tower, 26 Barakhamba Road, New Delhi India
Phone: 46107, 42804, 43984, Telex: ND3174 Cable: YOKOSO

Shikhar Travels

— シカール・トラベル —

“魅惑の インド・ヒマラヤ”

シッキム・ブータン・ガールワール・クマオン
クル・マナリ・ラダック・ネパール.....
へのトレッキングや登山を計画されている日本の皆さん！
当、シカール・トラベルは、通関・隊荷輸送からガイド、
ポーター、ポニーのアレンジなどすべてのご用命を承ります。



CAPT SWADESH KUMAR
(MANAGING DIRECTOR)

Shikhar

TRAVELS PRIVATE LIMITED

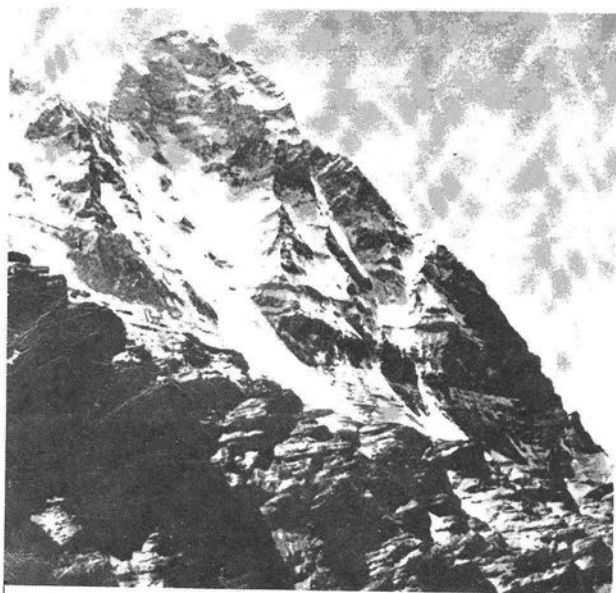
1,701, Nirmal towers,

26 barakhamba road new delhi-110001

tel. 42555, 42666 telex 031-4364 SHIK IN Cable SHIKHE

Branch office: Gangtok

Camp office: Joshimath & Uttarkashi



ヒマラヤ登山の専門家

SITA

並ぶものない山岳サービス

- ★ インド政府許可証
- ★ 通関手続
- ★ 交通機関
- ★ ポーター
- ★ ハイポーター
- ★ デラックス食料賄い
- ★ テント宿泊用具
- ★ マウンテンガイド

SITA WORLD TRAVEL (INDIA) PVT. LTD.

F-12, Connaught Place, New Delhi-110001, India

Cable : SITATUR Phone : 45961 Telex : 2823

日本代表

ファー イースト エンタープライゼス

東京都港区北青山3丁目6番18号 青山共同ビル

☎407-8100 (代表)

ヒマラヤへの装備



◎遠征隊の装備、相談にのります。



ICI 石井スポーツ



- 新宿登山本店 / 〒160 東京都新宿区百人町 2-2-3 ☎03 (208) 6601(代)
- 新宿西口店 / 〒160 東京都新宿区西新宿 1-16-7 ☎03 (346) 0301
- 水道橋ハードギアショップ / 〒101 東京都千代田区三崎町 2-8-14 ☎03 (264) 5575
- 水道橋ソフトウェアショップ / 〒101 東京都千代田区三崎町 2-8-6 ☎03 (264) 8901
- 大宮店 / 〒330 埼玉県大宮市宮町 2-123 ☎0486 (41) 5707
- 高崎店 / 〒370 群馬県高崎市新町105 ☎0273 (27) 2397
- ICI通販部 / 〒160 東京都新宿区大久保 2-19-10 東和ビル内 ☎03 (200) 7219

昭和五十一年五月第三種郵便物認可
月刊「ヒマラヤ」
二月号
昭和五十七年二月一日発行
通千五百三十三号
発行
日本ヒマラヤ協会
定価五百円